

入選 香川県 門田 京子 様 (高校生)

「年金って、将来本当にもらえるのかな。」そんな言葉を、友人たちとの会話で聞くことがある。ニュースやネットでは年金制度に不安を投げかける情報も多く、「払っても損するだけ」といった意見も耳にする。正直、昔の私もそう思っていた。年金は遠い将来の話で、今の自分とは関係ないものだ。

でも、ある出来事をきっかけに、公的年金制度は「誰かの命や生活を静かに支えてくれるもの」だということを、私は身をもって知ることになった。

私の父は、陸上自衛隊として長年国を守っていた。4人姉妹の私たちを大切に育て、毎日変わらず働き、休日にはたくさんの家事をこなしてくれる、そんな存在だった。父の背中には、ただ言葉にできない安心感があった。

しかし、その父は一昨年のも二月に突然、心筋梗塞でこの世を去った。あまりにも急な別れに、私たちはただ茫然とするしかなかった。何気なく続いていた日常が、ある日を境に音を立てて崩れていった。まだ何十年も生きられていた父。私たちもまだ皆、学生だった。

その後、母は涙をこらえながら、たくさん手続きへと向かった。生活のこと、学費のこと、これからの将来のこと――。4人の子どもの育てながら、家計を守っていく重さは、想像を超えるものだったと思う。

そのとき初めて、「遺族年金」という言葉を聞いた。

父が陸上自衛官として勤務し、厚生年金に加入していたおかげで、私たちは遺族年金を受け取ることができた。私はそれまで、年金とは老後にもらうものだと思っていた。しかし、年金は「家族を亡くした人の生活を支える」制度でもあることを知り、その存在の大きさを初めて実感した。

遺族年金があったからこそ、母はすぐに無理をして働きに出なくてもよく、私たち姉妹の進学や日常の生活も守られた。もちろん生活は決して楽ではなかったけれど、父の残したものが、形を変えて今も私たちを支えてくれている。制度のありがたさと、父の働きが繋がっていたことに、私は心から感謝している。

それ以来、私は年金制度について自分なりに調べるようになった。日本の公的年金制度は、

老後の生活を保護する「老齢年金」だけでなく、障害を負ったときの「障害年金」や、家族を亡くしたときの「遺族年金」など、人生のさまざまな場面で人々を支える仕組みになっている。

年金は、誰かが支払った保険料が、今まさに困っている誰かを支える“仕送り”のような制度だ。そしていつか、自分自身もその支えを受ける立場になるかもしれない。そう思うと、公的年金は「社会全体のやさしさ」だと感じる。

父が毎月きちんと納めていた年金保険料が、今の私たち家族を守ってくれた。それは単なる制度ではなく、父の人生の責任感や、家族への想いがこもったものだったと思う。

私は今、将来の夢として「航空自衛隊に入ること」を目指している。父の背中を見て育ったからこそ、自分も誰かを守る側になりたいと心から思った。空を守り、人々の暮らしを支える存在になるという夢を持ち、その実現に向けて勉強と努力を続けている。

航空自衛隊員になれば、きっと私も年金制度に加入することになるだろう。そのとき私は、ただの仕組みとしてお金を納めるのではなく、「これは誰かの未来を支える力になる」と信じて、自分の役割を果たしたいと思う。

年金制度は完璧ではない。社会の変化に応じて、見直しや改善も必要かもしれない。しかし、「誰かを思いやり、見えないところで支え合う」その本質的な価値は、これからも大切にされるべきだ。

父が生涯守り続けた「誰かのために生きる」という姿勢と、社会の中で人と人とが支え合う仕組み——。その両方を、私はこの遺族年金という制度を通して、確かに受け取った。そしてそれは、私がこれから生きていく道にも、強く根を張ってくれている。

これから私なりのやり方で、人を支える力になりたい。空から人々の暮らしを守る自衛官として、そして誰かの未来をつなぐ一員として、公的年金制度の一部を担っていくことに、誇りを持って生きていきたい。